

# 京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所  
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入  
中之町 10 番地

TEL: 075-211-7277

FAX: 075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。



お待たせしました！

## 第 30 回合宿研究会 in 京都

日時: 2026 年 1 月 12 日(月・祝)13 時～16 時半

参加費: 3,000 円 (学部生・院生 2,000 円)

会場: 佛教大学二条キャンパス 701 (オンライン配信あり)

参加申込は右の Google フォームよりお願いします。

申込 QR コード

ZOOM 視聴をご希望の場合は、

かならず 1 月 7 日(水)までにご入金をお願いします。

詳細は本誌 P.21 をご参照ください。

〈主催・問合せ〉 総合社会福祉研究所

TEL 06-6779-4894 E-mail: mail@sosyaken.jp

〈共催〉 全国福祉保育労働組合・一般社団法人社会福祉経営全国会議



# 人・まちの暮らしから学び、考える ～島根大学学生の柿木フィールドワーク～



島根県鹿足郡吉賀町柿木（旧柿木村）は、島根県の最南端に位置し、山口県に隣接する地域です。地域内には水質日本一の清流に選ばれた「高津川」が流れ、日本の棚田100選に選ばれた「大井谷の棚田」（写真）や「柿木温泉」があります。40年以上にわたる有機農業のとりくみや、公民館を中心とした社会教育活動が全国から注目されています。



そんな柿木村で島根大学の学生さんがフィールドワークをされるとお聞きし、一部同行させていただくことに。参加していたのは、島根大学法文学部教員の関耕平さん、仲地二葉さん、葛西洋平さんのゼミ生、総勢19名です。学生たちは、「社会教育班」、「有機農業班」、「事業協同組合班」、「町おこし班」の4つの班に分かれて事前学習をおこない、それぞれ仮説を立て、フィールドワークでの調査項目を整理していました。まずは、旧柿木中学校校舎を活用した複合施設「HEKICHI KAKINOKI」にて事前学習成果報告・討論会です（写真）。



「有機農業班」は、柿木村の農業の方向性について、規模拡大・効率化やスマート農業を打ち出す国の政策と、小規模多品目経営・地産地消を大切にする柿木村のとりくみにはズレがあるのではないか?との仮説のもと、柿木村の方針がなぜそこに至ったのか、農家自身が感じているむずかしさや可能性を調査したいと報告されました。そして、2日目は、班ごとに分かれてのフィールドワーク。畑に行って採れたての野菜をいただき、無農薬野菜の味のちがいを実感したり、学校給食との連携や流通のさまざまな工夫、安全でおいしいものをつくることへの思いなど、農家の方の話をうかがいました。



社会教育班では、公民館活動にかかわってこられた方、それを受けつぎ、今の公民館活動を担うみなさんにお話をうかがうなかで、柿木村で社会教育が根づき、発展してきた歴史や、地域の方の思い、ねがいをうかがいました(写真)。学生たちは、「いろいろ事前学習をしましたが、現地にきて、まちの人の生の声を聞くことができて、とてもいい経験ができました」「私たちは法経学科で経済のこと学んでいるのですが、人目線で、人を中心にものごとを考えないといけないということを強く感じました」と感想を話されました。インターネットひとつでなんでも情報が手に入る時代ですが、自分の足で、耳で、目で感じることの大切さを実感している学生さんの姿に、私たちもおおいに学ばせていただきました。

(写真・文 申 佳弥)

## ●特集● 考え、学び合う楽しさを次の世代に

『みんなのねがい』×『福祉のひろば』 月刊誌の役割と挑戦

塚田直也・社浦宗隆・高橋孝雄・中島素美・申 佳弥 10

## ●トピックス●

第30回合宿研究会 in 京都のご案内	21
有機農業を軸にした柿木村のとりくみ	福原 庄史 22
聴覚障害者にとっての戦後80年	朴 仁淑 28
若い人たちと共に考える社会保障	黄 驥 34
社会福祉法人経営実態調査(2025)から	
職員の定着にむすびつく要因をさぐる	高倉 弘士 38
年賀広告	42

## ●連載●

## 阪神・淡路大震災発生から30年 第10回

ボランティア活動の原点と30年の変化	長谷部 治 50
なかまと職員と家族と、ともに築く暮らしの場	
いまの暮らししかこれからもつづいてほしい	田中 美佳 54
続・ヘルパー歳時記 「Mさんの生活」に寄り添う②	58
J O B & A C T I O N 全国福祉保育労働組合(58)	
政党懇談と省庁交渉で声をあげる	62
私の履歴書 社会福祉経営全国会議(58)	渡邊 覚 64
夢はでっかく、歩は一步ずつ ～寄り添う仲間の光とともに～	

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎(78)	水野阿修羅 66
育つ風景 保育園の“上の”人	清水 玲子 68
映画案内 『人間の條件(第一部・第二部)』	吉村 英夫 70
現代の貧困を訪ねて	生田 武志 72

大原孫三郎・總一郎、山川均・菊栄、石井十次

(その4・山川均の社会主義活動)

## 似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

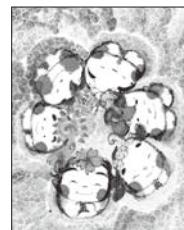
サナエあれば憂いが……?	ラッキー植松 74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜 76
花咲け! 男やもめ	川口モトコ 77

みんなのポスト 48／福祉の動き 78／今月の本棚 81

## ●グラビア● 人・まちの暮らしから学び、考える

～島根大学学生の柿木フィールドワーク～

●表紙の絵●  
神門やす子



# 研究成果をエビデンスにして運動の実践を

中澤 秀一

私が現職に就いてから、はや二〇年が経とうとしています。この間、社会情勢が大きく変化するなかで、学生たちの価値観も変化しています。とくに、最近の若者はコスパやタイパを重視する傾向が強く見られ、いまの学生たちは「空き時間」を嫌います。大学では履修したい科目を選択するので、空き時間が生じます。学生たちは、この授業のない「空き時間」をムダと感じてしまうのです。

私が学生だったころは、この時間を友人と語り合ったり、読書にあてたりしていました。ムダを楽しむゆとりの時間だったのです。ムダだと思つていたことが、あとから考えれば役に立つた、という経験はみなさんにもあるのではないでしようか。だからよく学生たちに、「人生にムダは必要だよ」とアドバイスしています。一見、ムダに思えてしまうようなことでも、将来きっと役に立つから何でもチャレンジしてほしい、と思うからです。

さて、私がいまとりくんでいる研究の一つに最低生計費調査があります。人間らしく生活するためにはどれだけの費用がかかるのかを、マーケットバスケット方式で一つひとつ積み上げて試算する調査です。この調査にかかるようになつたきっかけは、知り合いの労働組合関係者からのお誘いでした。ぜひ静岡県でも調査を成功させたいということで、私に白羽の矢が立ったのです。

しかし当時、最低生計費調査は私にとって未知の領域で、今後の研究に役立つとは思えず、時間と労力のムダとさえ感じていました。渋々ながら調査の監修を受け、手探りの状態ではじめた最低生計費調査でしたが、まわりの方々に助けられ、どうにか結



なかざわ しゅういち

1967年生まれ。静岡県立大学短期大学部社会福祉学科准教授。専門は社会政策、社会保障。2010年以降、静岡県をはじめ、全国の最低生計費試算調査で監修を務める。最低賃金だけでなく、賃金と社会保障の組み合わせで成り立つ社会の実現に向けた社会制度のあり方や労働運動の展望についても研究している。近著『最低規制に関する考察——最低賃金制度を中心に』(『国民医療』No362夏季号、日本医療総合研究所、2024年)

果を公表することができました。その後、全国から依頼が寄せられるようになり、当初はムダだと思っていたことが、いまでは私のライフワークになっています。つくづく人生とは数奇なものです。若い人たちには、「早計に『ムダである』」「役に立たない」と決めてしまうのではなく、どんどんチャレンジして自分の引き出しを増やしていくってほしいと思います。

こうしてひょんなことからかかわるようになつた最低生計費調査ですが、いくつもの重要な発見があり、それらが現実の制度を変えていく力となりました。

発見の一つは、健康で文化的な生活を実現するためには、現在の最低賃金額では低すぎることです。二〇二三年、岸田政権（当時）が最低賃金を一五〇〇円へ引き上げる方針を掲げましたが、その背景には「めざせ最賃一五〇〇円」という最低賃金引き上げ運動があり、その根拠となつたのが最低生計費調査の試算結果でした。いまや最賃一五〇〇円はあたりまえになつています。

もう一つの発見は、全国どこでも、生計費に大きな差はないということです。これは最低賃金の全国一律制を求める運動の根拠となり、これまで四五年間変わらず四ランク制で運用されてきた地域別最低賃金が、二〇二三年に三ランク制に変わりました。このように、科学的なエビデンスを示すことができれば、制度を変えることができるのです。今後も最低賃金だけでなく、その他の最低規制をより良いものにするため、調査をつづけていきたいと考えています。

# 『福祉のひろば』のこれからを一緒に

『福祉のひろば』は、二〇二七年四月より月刊から季刊へと移行し、年四回発行とすることを、二〇二五年の総合社会福祉研究所総会にて決定しました。

『福祉のひろば』の創刊は一九七九年です。翌八〇年から年四回発行の季刊に、二〇〇〇年四月号から月刊となり、昨年は月刊化二五年をむかえました。編集においては、児童、障害、高齢などの分野を超えて、生活保護、年金、医療、教育、災害など、広く人々のいのちとくらしを左右する分野を取り上げることを大切にしてきました。そうすることで、大きな社会のしくみのなかでそれぞれの分野が影響し合っていることを確認し、社会福祉・社会保障のあるべき姿、展望を、みんなで考え議論できる材料となることをめざしてきました。とくに、特集企画は座談会や取材記事をメインとし、企画自体が人との出会いやつながりを生み出してきたことも、『福祉のひろば』の強みだと思います。

いっぽうで、そうした『福祉のひろば』の意義や役割を、いまの時代のなかで十分に發揮し、次の世代につないでいけていくかというと、なかなか次の一步を踏み出せていないのが現状です。小誌の発行部数も漸減傾向から抜け出せていません。どんどん勢いを増す社会保障・社会福祉の変質、公的責任の後退による矛盾が福祉現場に押し寄せるなか、「権利としての福祉」を求め、広げていくことがいつそう求めら

れています。そうしたなか、総合社会福祉研究所としても、『福祉のひろば』としても、あらたな挑戦が必要ではないかと、議論をしてきました。

紙媒体としての『福祉のひろば』が必要なくなつたということではありません。インターネットが普及し、フェイクもふくめて情報があふれ、SNS等を悪用した攻撃や分断がすすむなか、紙の本の役割や意義は、いつそう強くなつていると考へています。一人で完結する学びではなく、みんなで一つのものを読み、学び、それぞれの考え方や意見を言い合うことで、「これが大切だね」「これはおかしいよね」と、集団で共通認識をつくっていくことは、福祉実践をおこない、社会福祉・社会保障の発展を求めていくうえで、不可欠です。これから、さらに『福祉のひろば』がもつてている可能性を広げ、發揮していくことをめざして、季刊化を決断しました。

紙の雑誌が置かれているきびしい状況は『福祉のひろば』に限つたことではありません。一人ひとりの発達と権利の保障、社会変革をめざして発刊されている月刊誌がたくさんあります。『みんなのねがい』もそのひとつです。今号の特集では、『みんなのねがい』の編集室におじやまし、月刊誌の編集・発行のむずかしさや工夫、つくり手の思いをうかがい、交流させていただきました。共通したきびしい状況はあります、雑誌を発行する、その先にある意義と役割を再確認できる場となりました。会員・読者のみなさんとも、これから『福祉のひろば』のあり方や可能性を、一緒に考えていきたいと願っています。

(編集主任 申 佳弥)